

ホタテ談義

13代佐呂間町長 船木長一郎

昭和29年8月8日佐呂間町長就任
昭和63年9月11日同職退任
9期34年間町長を務める
平成15年7月11日没

戦前サロマ湖周辺は、永い歴史の中で資源と見合った漁家が調和的に散在して漁村を形成していたが、終戦直後の混乱の中で樺太、千島方面から親戚縁者を頼りに、小さな漁船に生活の道具や漁業資材を積み込んで脱走してきたのである。

いわば緊急入植で、国有林であろうと民有地であろうと緊急ですからお構いなし。あとで北海道と町村が協力して住宅を建てたり、他に移住させたり大変苦勞の末、戦後処理を終えたのであるが、問題は獲る方が一挙に何倍かになったもので、資源は年々急激な減少を示した。

現状では到底生活を維持することは困難の見通し

で漁業者も町も対策に腐心中であったところ、当時からまたま北海道区水産研究所の故木下虎一郎博士、東北大学の今井丈夫博士等の指導で、宮城県産のカキ(牡蠣)の養殖試験を実施中で、このカキにホタ

テ貝の稚貝が付着していることに青年諸君が着目し、これが開発こそ神から与えられた資源とばかりに、特に命を賭けた長い研究試験が続けられ、昭和40年企業化、心配なしとの結論を得たのである。

しかし、いざ実行段階になって大きな壁にぶつかったのである。

一つは国、道の試験研究機関や学者諸公は、結氷するサロマ湖でホタテ貝養殖とはとんでもない危険行為であるとの見解で、如何に永年の研究成果を披露し

ても理解を願う訳に参らず、従って着業資金の系統借入も円滑を欠き、思い余って町に要請されたのである。

元来、漁民はいくら困ることがあっても行政の力を借りる様なことはなかったのである。余程困窮の結果で、お互い鳩首協議が続き結果として、町が損失保証をすれば貸付がどうやら可能との状況であるが、自治体が損失保証する場合、別段法律に規定がない場合は自治省の承認事項らしく、これ又技術的に専門機関で解明されない限り自治省もOKは出さないであろうし、若し、保証するとすればヤミよりないのである。

ヤミを承知で漁民の苦境打開の為、町議会に提案したのであるから勿論慎重論、積極論の大論議である。終戦後各残留部隊を廻ってヤミ資材を確保して農家や一般住民に配給した経験もあり、ヤミには一向に平気な性格保持者ですから、町議会の議論も乗り越えて損失保証決定となったのである。

記録によると損失保証の議決は昭和41年6月27日、損失保証額は1億2,186万8千円(当時の一般会計予算現額は3億1,341万6千円)、誠に大胆な行政措置である。勿論被害があつたら即時辞表提出の覚悟であつたが、しかし、寝ても覚めても脳裏から離れることはない。腹芸も自己の能力を超えた行為をすると若干落ち着きがなくなってくるものとみえる。

金策がついて愈々(いよいよ)企業化した・・・明か暗か、男勝負である。

養殖ホタテは外海(オホーツク海)の自然育成と違って経済的な市場出荷は稚貝から3年目である。仕掛け以来の推移は克明に記録されるばかりでなく、常に現状出向である。昭和43年は明暗の年であり、小職

5回目の選挙である。2年目までは順調に育っても(極端な水温低下など)一冬で全滅になる心配もあって、とにかく3年を経過して漁獲してみないと成果がわからないのである。

神の救いもあって初漁獲の結果は大成功。漁業青年の苦勞が遂に結実した。行政も参画したドラマ的大事業である。しかもヤミ措置があつたのである。

大きな感動・・・感激である。世の中は不思議なもので、素人の技術とヤミの行政の合作が成功したのである。

爾来、ホタテ養殖よりも外的な対応に漁組も役場も大変である。先ず漁業青年の研究発表には発表の良否よりも、ホタテ養殖とは大変なものとして北海道から全国へと続く。

一方、来訪者の急増でこれが又漁民の視察ならともかく、政治家、財界人、評論家、諸外国の水産関係者、特に町村前北海道知事さんは幾度か現地に足を運ばれ、開発した青年各位の勞をねぎらい、道条例による褒章を賜つたり、後には岸前総理大臣がお見えになれたり、近くは変わったところで9月27日外国公官25名が視察に来庁される。

今日では、ホタテ貝の養殖は道内は勿論、東北各県にも及んでいるが、私は最も危険視された朔北(さく



ほく)のサロマ湖で全国ではじめて未開の事業に成功し、このことが広く漁業振興に貢献できたことや、ホタテ貝が一般大衆から極めて縁遠い食品であるとのイメージを完全に払拭して、水産物としては一番安定した供給がされている現状から、内心高い誇りをもっているのである。

只、生物を上手に育成することは極めて難しいことである。陸奥湾にしても近くは噴火湾にしても自然界の自浄力を自らの欲望を離れて学問的に判断すべきである。

サロマ湖も決して問題なしとしないが、許容の限界を永い経験から現場の実態をふまえ、更に専門機関の助言を忠実に遵守しているのである。

去る8月9日付北海道新聞に掲載された国立がんセンターの研究で、ホタテを特殊処理したもののから制がん物質が発見されたそうであるとのことで、養殖を開発した一人として望外の喜びであり、是非とも成功を心から祈ってホタテ談義とする。

昭和53年10月

